

被災をきっかけにして新たに生まれた外部交流拠点に関する 第一次調査 —旧山古志村木籠集落の事例—

Primary survey about external communication base the newly born in the wake of the earthquake

-Case of Yamakoshi Kogomo village-

○山崎麻里子¹, 山口壽道², 佐藤翔輔³

Mariko YAMAZAKI¹, Toshimichi YAMAGUCHI² and Shosuke SATO³

¹ 東北大学災害科学国際研究所

International Research Institute for Disaster Science

² 公益財団法人山の暮らし再生機構

The Organization for Renaissance of Life in Motherland

³ 公益社団法人中越防災安全推進機構

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society

Yamakoshi Kogomo village was damaged because of the Chuetsu earthquake in 2004. Villagers operated the communication base office "SATOMIAN". It was regained a constant liveliness by interacting with people from outside the region. In this paper consider about formation process and characteristic at interaction sites with external in Kogomo village after the Chuetsu earthquake.

Key Words : Chuetsu earthquake, people from outside the region, communication base office

1. はじめに

2004年10月23日に発生した中越地震から7年目の2011年10月、被災地では新潟県中越大地震復興基金により「中越メモリアル回廊」（4施設3メモリアルパーク）が整備され、全国から訪れる来訪者に対し震災伝承、防災意識の啓発、震災復興からの新たな地域づくりの過程を紹介してきた。

一方で、地域住民が主体的に交流拠点を立ち上げ、震災前から続く集落行事だけでなく、新たな交流事業を進めながら賑わいを取り戻した地域もある。

そこで、本稿では、中越地震の被災地である旧山古志村木籠集落にある交流拠点「郷見庵」を軸に、集落住民と全国の応援団からなる「木籠ふるさと会」の成立過程やその特徴について考察する。

2. 人口・世帯

2004年10月の震災時は25世帯67人であった。2007年12月の帰村時は16世帯37人、現在は11世帯19人となっている。

表1 木籠集落人口・世帯数の推移

	震災当時 平成16年 10月	帰村時 平成19年 12月	現在 平成28年 4月
人口	67人	37人	19人
世帯数	25世帯	16世帯	11世帯
65歳以上人口	34人	19人	13人
65歳以上比率	50.7%	51.4%	68.4%

資料 震災時、現在：住民基本台帳（H16年10月、H26年4月現在）
既存時：山古志木籠集落復興プランより

3. 木籠集落の被害

中越地震では、旧山古志村は震度6強を観測。木籠集落を含む東竹沢地区においては85%の住宅が全壊判定を受けた。地盤被害も大きく、大規模な土砂崩落が発生し集落を流れる河川（芋川）がせき止められ、河道閉塞が発生したことにより全24世帯中14世帯が水没。残りの10世帯も全半壊の被害を受けた。住む場所を失った木籠の住民は合意形成を行ったうえで、平成17年1月に集団移転を希望。小規模住宅地区改良事業を活用し、水没した集落が見下ろせる場所へ新たな土地を求めた。



図1 水没した木籠集落

4. 「郷見庵」の設置

旧山古志村民約2200人による全村避難が余儀なくされ、翌05年に吸収合併される長岡市に設置された避難所への全村民避難及び、仮設住宅への入居が決まった。木籠集落の被害は特に大きく、住民は災害救助法の特別措置をもって約3年の仮設住宅での生活を送ることとなった。

2007年4月の避難指示解除を受け、その約2か月後の

5月30日、当時の木籠区長を中心として工事現場の払い下げコンテナを使用した「郷見庵」での資料展示を開始した。震災当時の新聞記事や写真、メッセージなどを展示し、来訪者に開放するとともに交流の拠点となるよう休憩所としても使われた。

2008年8月、集落の近くに移転され駐車場をアスファルト舗装、2010年10月、公益財団法人新潟県中越大地震復興基金地域復興支援事業「地域復興デザイン先導事業支援」を受け木造2階建ての現在の「郷見庵」が竣工した。



図2 「郷見庵」

5. 「山古志木籠ふるさと会」の設立

2008年7月、集落を離れた人や木籠のファン、外部支援者による「山古志木籠集落準区民の会」（以下、準区民の会）が立ち上がった。集落の年中行事や集落の維持を住民だけで行うこと難しかったことから準区民の会の力を借りて年中行事や地域づくり事業、交流イベントを実施してきた。

2010年5月、準区民の会を発展的解消し「山古志木籠ふるさと会」（以下、ふるさと会）として再編成。集落住民と集落外の人たち、外部支援者によって構成され、「地域の伝統、文化、暮らしの継承と豊かな自然の恵みを生かした元気な地域づくりを目指す（会則より）」活動を行っている。

準区民の会は木籠集落を応援したい地域外のメンバーで構成されていたのに変わり、ふるさと会では住民もそこに加わり、外部支援者の協力を受けながら主体的に地域づくりや交流イベントを実施する体制へと変化した。過疎化、高齢化が進む集落において、住民自らが参加することで交流が進み、さらに全国からのファンを増やす

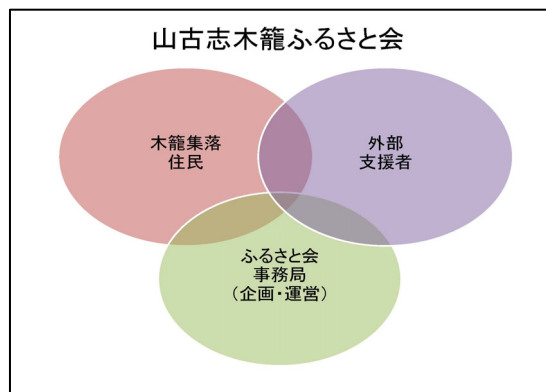


図3 山古志木籠ふるさと会体制図

きっかけともなっている。

会員は139名（2016年4月15日現在）。代表者氏名での登録であり、家族会員や夫婦で登録している場合その人数は含まれていないため、実際の会員数はこれよりでの登録であり、家族会員や夫婦で登録している場合その人数は含まれていないため、実際の会員数はこれより多い。年会費2,000円で、会員証の発行、「山古志木籠ふるさと便り」、木籠集落の四季を紹介するカレンダーを送付。年間22回に及ぶ行事を、集落住民と地域外の支援者からなる会員で開催している。

6. 「山古志木籠ふるさと会」の特徴

(1) 会員分布

ふるさと会の会員は全国12都府県に在住している。会員139人に対し、集落住民の会員は全体の1割。残り9割は集落外からの支援者となっている。また、同じ山古志地域内からも会員登録している住民がいる。これは震災復興の過程で協力体制にあった近隣集落の代表者やふるさと会の活動に賛同した住民が登録したものである。

新潟県内からの会員登録は半数以上に上り、長岡市街地から約25km、車で約40分程度の距離にあるため、週の半分以上集落に通う会員もいる。また、関越自動車道最寄りICやJR上越新幹線長岡駅から車で約40分程度という立地条件の良さもあり、関東圏からの会員が四分の一を占める。その多くは、震災で大きな被害を受けた「山古志木籠集落」をマスコミ等の報道で知り関心を持ち、現地を訪れ地域の自然と「人」に魅せられたからということ会員登録の理由に挙げている。（会員ヒアリング-2016年6月26日実施より）

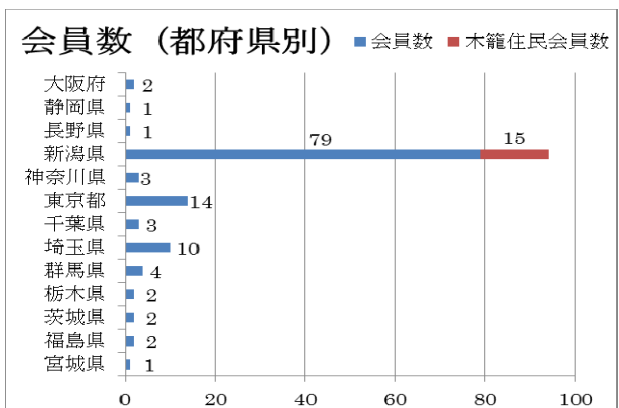


図4 会員数（都府県別）

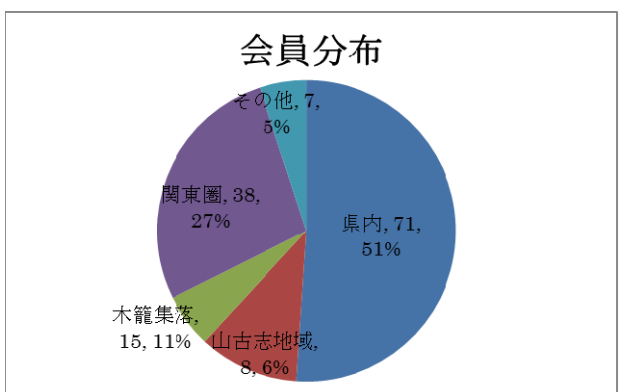


図5 会員分布

(2)山古志木籠ふるさと会の体制と住民参加

準区民の会は地域外の支援者が事務局となつて事業を進めてきたのに代わり、外部支援者と木籠住民がともに運営に参加するふるさと会は、集落の伝統行事を継続させるとともに交流イベントを実施することとしている。しかし、集落伝統行事については集落主催を原則とし、ふるさと会はそれを支援する側となることとしている。

これにより、集落行事への住民が主体的に参加し、住民と来訪者との交流が生まれる。地域住民との交流がさらなる木籠ファン拡大につながるといえる。新潟県中越大震災からの復興の歩みを取りまとめた「新潟モデル」の中でも「地域が主役の復興」という考え設定されており、「山の暮らしの再生」において住民の自主的・主体的な取り組みとそれを支える全国の応援団の存在が現在のふるさと会の活動につながっている。

(3)会員へのヒアリングより

「来てくれるお客様を楽しませる前に、まずは自分たちが楽しむ場所」（元木籠区長、故松井治二氏）という言葉にもあるように、交流拠点となる「郷見庵」やふるさと会の行事では住民や会員たちの活動的な声が響く。その様子に惹かれ、訪問者が後を絶たない。

例年、5月上旬から積雪を迎えるまでの約7か月の間郷見庵は来訪者を受け入れている。建物1階では住民が育てた野菜や会員が制作した商品の直売所となっており、当番制で会員が店番に立っている。中には、自らが当番でなくても、他の会員や地域住民、来訪者との交流を目的に郷見庵に通っている会員もいる。

震災後、水没した木籠集落を見学する人は後を絶たない。会員は、この見学者に対して震災当時や現在の集落の様子を説明し、お茶をふるまい会話を楽しむ。来訪者の多くは、この何気ない交流を求め、再訪するというサイクルができていく。

ここを訪れる会員や来訪者へのヒアリングをまとめると以下の通り。

- ・ 誰にも気兼ねしない、みんなのふるさと。実家のような場所、癒しの場
- ・ みんなの特技が生かされる場所
- ・ 友人・知人を案内したい場所、季節を感じられる
- ・ お茶を飲み、おしゃべりをするだけでいい。
- ・ 顔つなぎ。誰かに会えるから。
- ・ 何もなかったころだが「人」がいる。だから何度来ても飽きない。

木籠住民からの意見は以下の通り。

- ・ 地震がなければ、こんなこと（他との交流など）を考えもしなかった
- ・ 来てよかったと満足して帰ってもらいたい
- ・ 集落を離れた人が戻れる場所、つながる場所
- ・ 多くの支援者に支えられここまで復興した。恩返しをするために活動に参加している

7. おわりに

中越地震によって大きな被害を受けた中山間地域。その被害の様子は、当時から多くのマスコミによって全国に紹介されてきた。その後も、復興へ向けた住民たちの姿が紹介されることで人々の目に留まることとなった。

その被災地では、過疎化・高齢化の波が押し寄せる中、住民もさることながら外部支援者の協力を得ながらの新たな地域づくりが進められてきた。外からの視点で改め

て地域を見つめなおしたとき、被災地域の持つ力強さや山の暮らしの魅力に住民自らが気づきその魅力を発信することで交流人口の拡大につながり、新たな支援者を生み出した。

ふるさと会は、大自然に囲まれた集落とそこに暮らす住民の持つ魅力、会員のホスピタリティにより、震災から間もなく12年が経とうとする中で、地域の伝統、文化、山の暮らしを継承することを目的に活動を続けている。震災を契機に始まった活動が、現在まで継続されているのは、震災の爪痕が残る集落であると同時に、そこで活動する人々の姿に多くの人が共感したからである。

住民の高齢化が進み、今後の集落の維持、ふるさと会の活動の維持も課題として挙げられる中、2016年の総会では、次世代を担う新たな役員体制となった。「山古志木籠ふるさと会」がこれからどのような活動を進めていくのか、中山間地域における地域づくりの事例として今後の活動に注目したい。



図6 ふるさと会主催イベントの様子

謝辞

本研究は、日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学的研究推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的とした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：佐藤翔輔）の助成によるものである

参考文献

- 1) 新潟県中越大震災復興検証調査会：新潟県中越大震災復興検証報告書
- 2) 新潟県：中越大震災【前編】 - 雪が降る前に -
- 3) 長岡市：山古志6集落の再生の記録
- 4) 山古志村：帰ろう山古志へ、山古志復興プラン
- 5) 長岡市山古志木籠集落：木籠集落復興デザイン計画
- 6) 中越防災安全推進機構、復興プロセス研究会：中越地震から3800日
- 7) 稲垣文彦ほか：震災復興が語る農山村再生
- 8) 筑波匡介：新潟県中越地震における震災遺構 - 中越メモリアル回廊山古志木籠について -、災害・復興と資料第7号、新潟大学災害・復興科学研究所被災者支援研究グループ

表2 山古志木籠ふるさと会会員へのヒアリング

対象者	きっかけ	今も来館する理由、目的	頻度	誰と
木籠集落在住 70代女性	木籠住民として会の活動に参加し続ける。畑でとれた野菜の直売所に出し、お茶飲みして、集落の説明をするようになった	都合がつけば、店番をしたり、予約があれば来客対応もいとわない。 木籠に住んでいるから震災直後から多くの人と出会い、励ましてもらった。今度はお礼をしたいから	時間があればいつでも	一人
長岡市街地在住 80代男性 車で30～40分	魚沼市（旧広神村）に行く際、山古志を経由していた。郷見庵ができたころから立ち寄り、趣味の木工の話をしたところ「郷見庵で売ればいい」という話となり、会員に	アイディアマンで、木籠でやりたいことがたくさん。自分も楽しみ、来る人も楽しませる方法を考える。 ぬか釜炊きコンヒカリおにぎり販売、水芭蕉の植樹、芋煮会などやりたいことたくさん	週3～4回程度	一人。 知人の木工作家を紹介したり、協力者を集めてくる。
長岡市寺泊地域在住 60代男性 車で50～60分	退職後、時間を持って余し、ドライブで立ち寄り、住民との交流が生まれて以来会員に		月3回程度	主に一人。家族、友人、知人を案内
長岡市市街地在住 50代女性 車で30～40分	震災3年後、テレビで見ていた山古志、被災地を自分の目で見ておこうと、ご主人と来たのが最初。Nさん、松井さんと出会う。年会費を払えば、準区民として堂々と通える。父、母と慕う。前区長の想いを知り、花を植え続けた。	趣味の手芸作品販売だけでなく、他人の商品も紹介するようになった。木籠集落を応援するつもりで通い、徐々に自分の癒し、楽しみとなり、継続している。 山古志に住む人を増やしたい。魅力を伝えたい。 「実家よりも気楽な実家」	8～9日/月 仕事（介護職）の休みの日はほぼやまこしで過ごす。 「動かないと体がなまるから」	一人 「主人は一緒に来たいとは言わない」
東京都大田区在住70代女性 新幹線利用	新潟県魚沼市（旧広上村出身）一昨年、木籠を取り上げたテレビ番組を見て関心を持ち、会員に。	今回が初めての参加。年中行事がいろいろあることを知ったので、機会があればまた必ず参加したい。ふるさとを思い出す。	年1～2回	娘（50代）
東京都大田区在住50代女性 新幹線利用	母同様、テレビで見て、自然の多い美しいところだと思い、会員に	今回が初めての参加。 手作りのクルミ入りクッキーを持参したところ、木籠住民に「ここにはクルミもたくさんあるよ」と誘われ、秋に再訪することを約束。	年1～2回	母と
長岡市小国町在住70代男性 車で40～50分	隣の家の人が会員だったため、さそわれてイベントに参加した。小国町も自然が多く山のあるところだが、活動団体がいない	小国町の自然も好きだから、早起きして山歩きをしているが、年中行事や来訪者との交流の場所として木籠に来る。何することはないが、人つなぎ。	週3～4回。 平日含む	主に一人
新潟市在住40代女性 車で90分	大学の研究で学生とともに現地調査に入り、前区長と出会い会員に	授業で学生を連れてくるのが難しくなったが、自分だけでもかかわりを続けようと思い、参加している	年3～4回 イベントに合わせて	夫婦で
新潟市在住60代男性 車で90分	震災後から前区長の生き方、人生観をテレビなどで見ていて共感していた。去年から会員に	昨年の笹団子づくりに孫と参加。 「今年も行きたい」という孫を連れて、娘夫婦も連れて家族で参加。	年1～2回 イベントに合わせて	一人 たまに家族と